

## 「ハンナ・アーレントの教育思想に関する研究 ～「権威」論を中心にして～」

専攻 学校教育学  
コース 教育コミュニケーション  
学籍番号 M10003B  
氏名 梅原英治

### 1 研究目的

本研究の目的は、教育における権威を考察することによって、権力的関係に陥らない教育者と子どもとの関係を構想することにある。その際注目するのが、ローマ的権威の研究から独自の権威論を展開した政治哲学者ハンナ・アーレントの教育思想である。彼女の教育思想を詳細に検討することにより、教育における権威の必要性と、権威的存在である教育者に求められる倫理について考察する。

### 2 論文構成

#### 序章

第1章 1950年代のアメリカ公教育に対する  
アーレントの問題意識

第2章 教育の本質としての「新生」

第3章 教育者の「権威」と責任

終章 アーレント教育思想の二面性

### 3 論文概要

まず序章において、アーレント教育思想の先行研究として、アメリカの教育哲学者たちによって編まれた論集『Hannah Arendt AND Education』と、日本の教育哲学におけるアーレント教育思想研究の第一人者である小玉重夫の教育論が取り上げられる。両者のアーレント解釈のポイントが確認されたうえで、それぞれの論考の不十分な点が指摘される。

第1章においては、1950年代のアメリカ公教

育に対するアーレントの問題意識が取り上げられる。アーレントが批判したのは、進歩的教育と人種統合教育である。彼女にとって進歩的教育の問題点は、子どもの生活世界の独立性を重視し、その自発的活動を賛美するがゆえに、大人の世界から子どもを分離してしまい、彼らを大人の古い世界に導くという公教育本来の役割を蔑ろにしている点にあり、また人種統合教育の問題点は、社会問題の解決を学校空間にもち込むことによって、子どもを世界へと導く場を破壊してしまう点にあることが示される。そして、両者に対するアーレントの批判はともに、公的空間を更新する機会と場所が失われてしまうことに向けられていることが確認される。

第2章においては、アーレントが教育の本質とする「新生」について考察される。「新生」とは、この世界へと生まれた子どもが、自然と歴史の「自動的過程」(アーレント1994、228頁)を妨げ、奇蹟的で「新しく革命的なもの」(アーレント1994、259頁)を世界にもたらすことである。ただ、子どもが新しい存在であり、新しく「始める」ことができるのは、子ども自身に備わっている能力ではけっしてなく、彼らは旧い世界に導かれるかぎりにおいて、「その真価を發揮できる」(アーレント1994、254頁)ことが説明される。さらに、子どもが新しく「始める」ことができるのは、人間が時間的存在として創造されたことにのみ根拠をもつことが示さ

れ、子どもが「始める」ために、大人には古い世界を代表する保守的態度が要求されることが明らかにされる。そして最後に、子どもの「新生」が可能になるための前提である、私的領域と公的領域の区別が抱える問題点について考察される。

第3章においては、まずアーレントの解釈に依拠して、ローマにおける権威の独自性が確認される。ローマにおいては、ローマ創設という過去の出来事が神聖化されることによって、父祖や年長者に対して特別の崇敬が与えられていたのだが、そのため教育者は、意識することなく、古い世界と新しい子どもを和解させることができた。しかし、ローマ的権威が失われた現代においては、生起した出来事を「継承し、問いかけ、思考し、想起する精神」（アーレント 1994、5頁）が、教育者に必要とされることが明らかにされる。章の後半では、新しく世界へと呼び出された子どもに対して、大人が古い世界への責任を負うことが確認される。「教師の権威はかれがその世界への責任を負う点に基づく」（アーレント 1994、255頁）とアーレントが述べるように、新しく「始める」ために世界への服従を余儀なくされる子どもに対して、古い世界を代表する大人は、権威的存在として古い世界に対する責任を担わなければならないのであり、そのため大人は、かつて人びとによって演じられた「始まり」としての出来事を受け継ぐことによって、子どもがこの世界において「始める」ことを肯定し、またあるがままの世界を受け容れ、「事実の真理」（アーレント 1994、357頁）を物語ることによって、子どもを世界の現実と和解させる。それが、子どもをこの世界へと呼び出した大人に要求される倫理的態度であることが明らかにされる。

終章においては、権威的存在である教育者に求められる保守的態度に、アーレント教育思想の理論的困難が孕まれていることが示される。それは、異なる二つの保守的立場を要求される教育者が、「行為者＝演技者」でありながら同時に「注視者＝観客」でもあるという立場におかれるという問題である。アーレントの教育思想は、教育者に両立不可能な態度を要求するという点において、破綻しているようにも思えるのだが、この両者の立場は決して矛盾しているわけではなく、彼女の理論においては、この二つの異なる立場が、判断力に含まれる二つの能力として置き換えられていることが指摘される。

#### 4 結語

以上、アーレントの教育思想を考察することにより明らかになったのは、世界を死滅から救う存在として、新しく世界に呼び出された子どもに対して、大人には古い世界への責任に基づく教育的権威が求められるということであり、そしてそのとき大人が子どもに対して取るべき倫理的態度は、古い世界を代表し、あるがままの世界を受け容れ、肯定する保守的なものとならざるを得ないことであった。今後は、アーレントの教育思想を拠り所としながら、現代日本の公教育、とりわけ中・高等学校における教育の現状を具体的に検討し、アーレント教育思想の現代的価値を見出していきたい。

#### <引用文献>

ハンナ・アーレント（引田隆也、齋藤純一訳）  
『過去と未来の間』みすず書房 1994年

主任指導教員 安部崇慶  
指導教員 大関達也